



特旨ヲ以テ位階被追陞
贈従四位下立入宗繼

贈従二位

右謹テ裁可ヲ仰ク

明治三十一年三月二十八日

内閣總理大臣侯爵伊藤博文



閣



閣 四一 三月廿六日裁可

四月九日達信

明治三十一年三月廿五日

内閣書記官



内閣總理大臣

内閣書記官長

宮内省申牒贈從四位下立入宗継位階追陞ノ
件ヲ按ズルニ宗継ハ永祿元龜ノ際海内潰乱シ
一人ノ尊王ノ義ヲ知ルモノ無キニ方リ慨然奮起シ
織田信長ヲ説キ遂ニ皇室ヲ再造シタル功績ハ
千古青史ヲ照スニ足レリ而ルニ宗継ノ子孫淪落
シ其墳墓ヲ顧ルモノ無キニ至ルノ不幸ニ遭遇
セリ今ヤ有志者之ヲ慨キ旌忠碑ヲ建設スルノ
舉アリ依テ宮内大臣申牒ノ如ク舊功ヲ追褒セラ
レ特ニ從二位ヲ贈ラレ然ルヘシト認ム

内閣

御沙汰按

贈從四位下立入 宗継

特旨ヲ以テ位階被追陞

贈從四位下立入 宗継

贈從二位

應仁以來海内分裂輦轂ノ下兵馬倥傯ノ地トナリ
宮闕頽廢御料供セス立入宗繼父祖ニ繼キ御倉ヲ預
リ私財ヲ以テ供御ヲ補給スレトモ費途ノ永續セサラン
コトヲ恐レ萬里小路惟房ニ就キ信長ニ綸旨ヲ賜ヒ撥
亂反正ノ功業ヲナサシムヘキヲ説ク惟房内外ヲ畏憚
シ躊躇決セス宗繼涕泣シテ曰ク今ヤ皇室ノ式微此
極ニ至ル實ニ臣子ノ空視スヘキ時ニアラス事若シ破ルハ
臣獨リ其責ニ任セント是ニ於テ惟房竊ニ之ヲ執奏セリ
正親町天皇睿感淺カラス永祿五年十月宗繼ヲシテ熱

宮内省

田神宮ノ奉幣ニ托シ尾州清洲ニ赴キ三事ノ綸旨ヲ
信長ニ宣達セシム曰ク宮闕修理ノ事曰ク御料所ヲ復ス
事曰ク退轉ノ公卿相續ノ事且賜フニ合香ヲ以テス信
長沐浴更衣シテ勅旨ヲ拜シ感泣シテ曰ク不日入朝
カヲ竭シ報ヲ圖ルヘシト同十一年信長京師ニ入り深ク
聖恩ヲ謝シ嚮ニ下シ給ヒタル三事ノ綸旨ニ對シ全然
其功ヲ奏スルヲ得タリト云フ

顧フニ永祿元龜ノ際群雄方隅ニ割據シ互ニ相敵視シ
拏攫搏鬪皇室ノ式微ヲ顧ミル者ナシ此時ニ當リ宗
繼勤王致死ノ志ヲ懷キ流箭飛丸ノ間ヲ過キ信長

ヲ迎ヘテ遂ニ皇室ヲ再造シ

睿慮ヲ安シ奉リ

且信長ヲシテ尊王ノ志ヲ興サシメ秀吉家康亦相紹
キテ之ヲ師トスルニ至リタルハ主トシテ宗繼ニ起因シタルモノ
ト云ハサル可ラス嗚呼宗繼皇室ノ為メ苦心經營シタル
其効績ノ及フ所遠且大ト云フヘシ今ヤ旌忠碑建設ノ
舉アリ此際宗繼ノ功勞ヲ録セラレ特ニ迄二位ヲ追陞
セラレ可然ト思考候ニ付御銓議相成度此段及申牒候也
明治三十一年三月十八日

宮内大臣子爵田中光顯



宮内省

内閣總理大臣侯爵伊藤博文殿

内願書

立入左京亮宗繼朝臣旌忠碑建設、付御補助奉
仰度旨昨年五月御省へ出願仕候處
思召ヲ以テ御金百圓下賜相成一同難有仕合奉
存候然ルニ朝臣ノ
帝室ニ大勲勞アルハ右出願書面ニ記載仕候通
ニテ去文改年間既ニ贈位モ被為在候得共乍恐
明治維新ノ聖世ニ際シ更ニ昇叙ノ特典ヲ蒙
リ候ハ、旌忠碑上一大光輝ヲ加ヘ朝臣ノ靈定
テ地下ニ感泣セン且天下ノ臣民之ヲ見聞スル
者ヲノ勤王報國ノ精神ヲ奮起セシメントス
冀クハ某等ノ微衷御洞察之上可然御執奏被成
下度此段内々願願仕候也

明治三十一年二月廿八日

建碑發起人總代

從五位 河田景福
正五位 谷鐵臣
從四位 宇田淵
從三位 伯爵勸修寺顯允

宮内大臣子爵田中光顯殿